
エターナルゾーン

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エターナルゾーン

【Nコード】

N 6 7 3 3 W

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

ケータイアプリのエターナルゾーンを小説化してみました。あと、登場キャラには若干チートが入ってます。

バスカル出身のファイター、キッド。同じくバスカル出身のメイジ、アンジ。二人は幼少期からの幼馴染で、互いが十八歳になったある日、冒険に出ることを決意する。旅の中で様々な人と出会い成長していく二人。時には厄介事に巻き込まれながらも楽しく冒険を続けて行くが

旅立ち（前書き）

知ってる人いたら何かしら感想ください。

旅立ち

「キッド、準備できた？」

「ああ。今行く」

テントの外から訊ねてくる声にそう答えながら、俺は壁に立てかけてあった新調したばかりの長剣、《アイアンソード》を腰に差す。そして、それと対になった盾、《ストーンバックラー》も同じように左腕に装備してテントを出ると、俺の幼馴染のアンジが白いローブに身を包んでそこに立っていた。

「まったく、家にまで迎えに来なくても良いって言っただろ？ 律儀な奴め」

「ははは。まあ、キッドだったら迎えに来なくても良いかなとは思ってたんだけど、これから旅をする仲間だし、一応ね」

そう言っただけでアンジはまた笑う。

コイツと俺は幼少期からの幼馴染だが、その生い立ちは今と違っていいほど違う。

俺たちが住んでいるこの街は「貿易都市バスカル」といい、メノールアでは最大の港町であるため活気があり、立地やいろいろな部分によって縦に三つの地区に分けられている。

まず、西側の地区はマナ区。ここには大聖堂と、神官を育てるための神学校がある。基本的に金持ちが住むところで、街の北西には海運王と呼ばれる人の屋敷があるし、俺の幼馴染であるアンジもこのマナ区出身だ。

神学校を卒業した人は普通ならそのまま神官になるか、教師やそれ相応の職に就く場合が多い。というか、それ以外の道はほぼ有り得ない。もしそれらの職に就かずには俺らみたいな世界を旅する冒険者になるうって言うなら、そいつは相当な物好きかただの馬鹿のどっちかだ。

ただ、アンジは馬鹿なほうではないため相当な物好きの一人と言うことになるが。

次に、港に面した中央の地区はアック区。ここでは日夜貿易の取引や売買が行われていて、年中活気のある場所だ。区の北西には武器や防具を作る鍛冶屋があつて、その工房ではかなり装備レベルの高い防具も作られている。

中央には遊撃隊の支部もあり、遊撃隊員に志願する者も多い。そう言った意味でもアック区は活気があり、海を渡ろうとする冒険者もいるため自然と高レベルの人も集まる。

最後に俺の塹^{ねぐ}があるザガ区だが、はっきり言ってここはスラム街だ。区の西側は酒場とかがあつてまだ活気はあるが、東側に行くと殆ど無法地帯になるため余所者はめったに来ない。まあ、ここは俺の庭みたいなものでここでのやり方は分かつてるから特に困ることはなかったが。そう考えると、ここまで一人で来たアンジはかなり肝が据わつてるのかもしれない。

「いよいよだな……」

「うん。僕、昨日は楽しすぎてあまり寝られなかったよ」

「遠足前の子供か。ほら、行くぞ」

俺はアンジの前に立って促す。すると、アンジはそんな俺を見て、

「しっかり守ってよね」

そんなことを言ってきたため、

「気持ち悪いこと言ってるな」

と軽く一周する。

とはいえ、そんなこんなで俺とアンジの旅は幕を開けた。

ZONE〜西グリディアナ樹海〜? (前書き)

二話目です。

それと、これは分かる人だけが読むことを前提で書いているので説明等には若干の不備があるかもしれませんが。

寛大な心で読んでください。

ZONE 西グリディアナ樹海？

バスカルの北東方向にはかなり大きな樹海が存在している。メノアの連中が決めた名前はグリディアナ樹海と言って、駆け出しの冒険者にはサシでやるのは結構つらいモンスター、ゴブリンが所々にいてそこらじゅうを徘徊している。

他にも、犬と同じくらい大きな体を持つジャイアントスラッグというナメクジ型のモンスターや、直径が二メートル以上ある花弁を持ったラフレシアのようなモンスター、マンイーターなどがいるが、このあたりは対処法を間違えなければこっちが逆に倒されることはない。

なかでも、ナメクジのほうは駆け出しでも倒せない奴はいないと言われているほどだから脅威なんて一切ない。ナメクジも狩れないような奴はこれから先どうしようもないからな。

だが、今日の樹海はどこか様子がおかしかった。モンスターがどこかそわそわしている様子で、ザガ区からそれほど遠くない場所に巣を作っているゴブリンの親玉、《GOBLIN LUNBERJACK》と呼ばれるモンスターでさえもどこか怯えているようだった。

「なんか、今日はモンスターどもの様子がおかしいか？」

「うん。僕も丁度同じことを思ってたんだ」

アンジもどこか強張ったような表情をしている。俺もアンジも今更ゴブリンなんかには怯えるようなヤワな鍛え方はしていないが、それでも空気の違いは肌で感じていた。

「どうする？ やっぱ草原を通っていく方向にする？」
「うーん……」

アンジの問いに、俺は頭を抱える羽目になった。

冒険の指針としてどこに向かうかを話し合った時、俺とアンジの意見は、まずは北にある星の町、ラプトへ向かうことで一致した。ラプトは丘陵地帯にある町で、他の冒険者が集まるところでもあるためそれなりに活気がある。そして何より、皇都に向かうなら必ず通ることになるからだ。

ラプトに向かうための道は大きく分けて二つ。東西グリディアナ樹海を抜けて高原を通る方法。それと南北フラップ草原と8カラット草原を抜けて高原を通る方法だ。

どちらにせよ高原を抜けることになるのでその辺りは問題視していなかったが、問題は樹海を通るか草原を通るかだった。

樹海には前述の通りゴブリンが多数徘徊していて、危険度はかなり高い。中でも親玉は別格で、今の俺たちではその圧倒的な攻撃力に瞬殺されるのがオチだろう。奴を倒すことで手に入れることが出来る《ウツズマンケープ》はファイターの俺にはかなり魅力的な代物だが、ヌーカーとして活躍できるアンジがパーティーにいる以上そこまで欲しい物でもない。

対して草原は比較的穏やかなもので、自分から攻撃してくるようなモンスターは多くない。まあ、樹海が隣接しているためにゴブリンも何体かいるが、群れを形成しているわけではないから倒すのも逃げるのも容易だ。

だが、当然のように問題もあるわけで、草原にはレッサー・ドレイクという凶暴なモンスターが生息している。呼び名が長いので大体ドレイクと呼んでいるが、見た目は恐竜のようなものがとても多く、体躯も著しく大きな個体が多いため、中級者であってもかなり苦戦するようなモンスターだ。

その大きな体を生かした攻撃力やHPの高さ、果てにはフレイムブレスという、直線距離にして20mを軽く超える超高範囲の火属性ブレスを放ってくる。そんなモンスターが、北側には大量に生息してるって言うんだからタチが悪い。

結局、安全面から考えて樹海を通ることにしたのだが、あまり意味はなかったようだ。

「どうする？ やっぱり今からでも草原を抜けるルートに切り替える？」

アンジがそう言ってくるが、俺としては草原を抜けるルートはなるべく避けたかった。

なぜなら、俺の直感で行くと今北フラップ草原には《DUSAN^{デュシャン}》がいる可能性が高いからだ。

デュシャンは北フラップ草原にいるドレイクの中でも飛び抜けた力を持っていて、正直言つて今の俺たちじゃ手に負えない。まあ、俺たちじゃなくても手に負えるような存在ではないが、まあ、

ナメクジ<<<マンイーター<<<<<<<ゴブリン<<親玉<<<<<ドレイク<<超えられない壁<<<<<<<<<<デュシャン

ってところか。

まあ、ザイン辺りに行けばデュシャン程度のドレイクはわんさかいるらしいが。

それからまた数分話し合った結果、俺たちはこのまま樹海に行くことにした。

思えばこの時の選択が、俺の一つ目の間違いだったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733w/>

エターナルゾーン

2011年10月20日17時11分発行